

〔海外ラボ紹介〕 ICRF (Imperial Cancer Research Fund)

—J. Bodmer と J. Trowsdale 研究室—

猪子 英俊

東海大学医学部, 分子生命科学

Imperial cancer Research Fund (ICRF) は、ロンドンのオペラやミュージカルのメッカ、コベントガーデンから歩いて5分ほどのいわゆるウエストエンドのLincoln's Inn Fieldという、絶好のロケーションにあります。ロンドンの中心部とはいえ、緑多き公園や樹木、由緒ある歴史的建築物、美術館や博物館（大英博物館は歩いて10分）などに囲まれ、静かな環境と文化施設に恵まれています。ICRFはこのLincoln's Inn Fieldの研究所のほかにもロンドン郊外などに2つの研究所とオックスフォード大学やエジンバラ大学などに多くのbranch unitを擁し、70の研究室部門に技術員を含めて総勢1,000名に達する研究者が働いています。

ICRFの資金源はまったく政府に依存せず、すべて寄付で賄われているという、日本で考えられない特異な財政体系からなる独立採算制で運営されています。エリザベス女王を第1のパトロンとし、英国人の寄付好きの気質に助けられ（英国の家計簿には必ずdonationの項目があります）、また英国内に広がる100以上のICRFと呼ばれる、スーパーマーケットチェーン店（これらの店はすべてボランティアの無料奉仕により支えられている）からの売り上げなどにより年間3,300万ポンド（約80億）の研究費が使用され、がん撲滅を目指して研究に励んでいます。英国の慢性的不況による文教費削減のあおりを受けて、英国の大学や研究所が財政的危機を迎えているのに対し、ICRFはその豊富な資金力にものを使わせて、各地の大学、研究所や病院に次々とbranch unitを作り、その勢力を上げつつあります。また、英国の多くの研究者の米国への頭脳流出が問題になっていますが、ICRFは彼等の大きな受け皿として英国内で大きな期待を集めています。もっと

も、最近ではさすがに浪費がたたって、借金経営に落ち込み、以前のように湯水の如く研究費をつぎこむというわけにはいかなくなったようで、W. Bodmerもその責任をとって所長職を辞任した、ということ（現在、W. BodmerはGeneral Directorという肩書になり、細胞分裂の研究で有名なPaul Nurseが研究所長に着任しています）。

筆者は1986年9月より1年間、ICRFの訪問研究員として、John Trowsdale研究室で過ごしました。このHuman Immunogenetics Lab.は主にHLA抗原遺伝子の構造と機能を中心テーマとしてJohn Trowsdale以下post-doc 2名、大学院生3名、訪問研究員2名、技術員2名の計10名より構成されていますが、隣にTissue Antigen Lab. (Julia Bodmer), Director's Lab. (Walter Bodmer), Somatic Cell Genetics Lab. (Ellen Sollomon), Human Cytogenetics Lab. (Denise Sheer), Human Molecular Genetics Lab. (Peter Goodfellow) など、W. Bodmerグループとも呼べる各部門総勢約70名ほどが密接な交流と討論のもとで共同研究を行っています。

Julia BodmerのTissue Antigen Lab.は、HLA Nomenclature委員会で活躍しているSteven Marshをはじめとする技術員5人とpost-doc 2名の計8名で、HLA抗原の血清学、遺伝子タイピング、パネル細胞の収集と保存の基礎的な研究を精力的におこなっています。いわゆる、ルチーン検体の検査の義務が全くない羨ましい環境のもと、HLAタイピング三昧を楽しんでいる印象を受けました。それでこそ、HLA抗原の命名や細胞の管理などで、世界をとりしきる博識と余裕が生まれるのでしょうか。Trowsdale研究室とJulia Bodmer

研究室とは、遺伝子クローン、HLA の遺伝子タイピング、トランスフェクタント、トランスジェニックマウス、遺伝子組換えによるモノクローナル抗体などに関して、材料、技術、情報の交換などで、密接な共同研究を進めており、特にこれらの材料の豊富さは、世界的にみても随一といって良いでしょう。

土日にもラボに出てきて、不興を買う日本人や若い post-doc を除く、ICRF の一般的な研究者の一日のラボでの生活は、ざっと次の通りです。9時半頃ラボに顔をだし、ひとしきり挨拶や仲間のご機嫌をうかがったあと、実験の準備をします。10時30分頃からティータイムで30分はだべり、12時まで仕事をこなす。12時から2時頃までたっぷり、ランチを楽しみ、午後の実験をはじめると、再び3時よりティータイムを過ごし、実験のあと片付けをして、5

時にはきっちり帰宅する、といったものです。このような、毎日でいつデータがでるのだろうかという気になりますが、一人のリーダーが多人数の仲間に仕事をうまく分担して、世界をリードする業績を生み出す体制には見習う点が多いと思います。それだけに、頻繁に行われるラボミーティングでは、上下の分け隔てなく、厳しいディスカッションが展開されます。

ICRF の各研究者は研究費グラントの申請や学生の教育などに時間を割かれることもなく、研究以外の時間は研究所近くのパブのビター(ビールの一種)を飲みながら雑談に耽ったり、ロンドンの充実した文化環境で豊かな研究外活動(!)を楽しんでいます。このような余裕が英国特有の奥深い研究を生み出す素地となるのでしょう。